

小泉信三賞

「表層的クリエイティブ」からの脱却

「令和時代の実学」を問う

浦上真緒うらかみまほ

(栃木県／栃木県立宇都宮女子高等学校一年)

1. はじめに

「AIより人間の方が優れている能力は何か」と問えば、大抵の人の脳内には一度、「クリエイティブ」の文字が浮かぶだろう。既に計算や処理能力、単純作業の正確性で大敗を喫した人間が、次にその存在意義を求めたのは創造性であった。しかし、AIにクリエイティブな仕事はできない、という通説が今根底から覆されようとしていることに、私は恐怖と危機感を覚えている。二〇二二年八月、『Stable Diffusion』や『Midjourney』などのAI画像生成サービスが人間同等かそれ以上のクオリティの画像を生み出してから、通説崩壊の兆候はより顕著になった。創造的なことはでき

ないと言われていたAIが、人間が何十時間もかけて描くような大作を、プロンプト（指示文）を打ち込むだけで、ものの数分で生成できるようになってしまったのである。業界は騒然となり、ネット上では物議を醸した。AIが学習に使ったデータの著作権は守られているのか。AIで画像を生成する人はクリエイターだといえるのか。そして、AIはクリエイティブな人間の仕事を奪うのか。

これまで利用の用途が限定的で、プログラムの域を出なかつたAIは、いまや代替が難しいとされていたアートや音楽の世界にさえも参入し、短時間で高クオリティの作品を大量に生み出し続けている。無論、AIの作品が技術的に優れているからとい

って人間が思考の果てに作品を生み出すことの価値が全てAIに代替されたとは到底思わない。私自身、描画や楽器の演奏をすることに幸せを感じるものが多々あるし、作品に感銘を受け、救われた回数も数えきれない。しかし、「絵を描く」「作曲をする」などの行為を経たかとはともかく、「作品」を生み出すことそのものは人間だけの特権ではなかつたという事実は認めざるを得ないだろう。「クリエイティブな仕事」が意味するところはなにも芸術だけではないと承知しているが、画像生成、文章生成、創業など、その普及の分野が多岐にわたるAIの前では、「クリエイティブの厳密な範囲」についての議論は甚だ不毛である。我々もはや「クリエイティブ」という言葉にすら、自らの存在意義を無条件に委ねることができない時代に立っているのだ。

クリス・ダフィは、彼の著書の中で、AIを「誰もが自分の目的達成のために利用できる民主的な道具になりつつある」(注1)と表現している。AIは私達の生活の中に溶け込み、既になくってはならないものと化した。私達はデジタルデバイスからいとも簡単に最新テクノロジーの恩恵を享受できる。しかし、AIは便利な道具である

と同時に、これまでの社会を一新する「起爆剤」としての側面も合わせ持つており、大量失業をはじめとした莫大なりスクを内包する存在でもある。本論では、「A I 社会を生き抜くために、私達は何を学ぶべきか」という問いを解決すべく、社会体制の急激な変革が起きた明治時代と、その激動の時代を生きた福沢諭吉からその端緒を探っていきたいと思う。現代において、A I はまさに、幕末の黒船だ。文明の転換点において、近代日本を作り上げた偉人は何を思い、明治維新をどう見つめていたのか。「令和時代の実学」とは何かを定義すべく、まずは明治維新に対する福沢の見解を見ていこう。

2. 明治維新から見る現代

果たして、福沢の目から見て幕末から明治維新にかけての日本の変貌は好ましいものだったのだろうか。福沢は『文明論之概略』（注2）の中で、「幸にして嘉永年中ペリリ渡来の事あり。これを改革の好機会とす」と述べ、「我国の人民積年専制の暴政に窘められ、門閥を以て権力の源と為し、才智ある者といえども門閥に藉てその才を用るにあらざれば事を為すべからず。（中

略）この停滞不流の間にもなおよく歩を進めて、徳川氏の末に至ては世人漸く門閥を厭うの心を生ぜり」と論じている。ペリーの来航によって幕府の脆弱さを知った国民は、専制政治への不満と政府討伐の可能性を感じ、攘夷論を唱えてついに幕府を倒して身分制度の廃止にこぎつけるまでになった。福沢は、西洋との交流がきっかけで国民に芽生えた庄政に対する「疑いの精神」を賞賛していたのである。この人民の変化には一つ見逃せない点がある。それは、被治者がこれまで政治に意見できず、変革を起こせなかつたその原因こそがこの身分制度であつたという点だ。政府は人間を格付けし、徒党を組んで意見を主張することを歴史上で幾度も弾圧してきた。時を経て権力者が貴族から武士に代わり、統治組織も変化しているにも拘わらず、庶民が一向に政治を変えることができなかったのは、強者と弱者の二分化が権力を偏重させていたためだ。

しかし西洋諸国にも同じく階級制度は存在し、徒党を組めば上流階級の目の敵にされていた。西洋と日本の政治を分けたもの、それは福沢曰く、「議論する習慣」である。一国の内にも多様な意見がある西洋では、

自分の意見を主張する必要性から言い合いが次第に議論の体を成していった。また、不服ながらも相手の言い分にも事情があることを知るゆえに、民衆は時に団結して、後世まで語り継がれる「革命」を起こすまでの力を発揮した。（その変革の手段は時勢によって徐々に戦争から学者の会議へと移るが）その結果として、西洋政府は人民の議論を発端として変化してきたのである。これに対して、日本は西洋の様に大人数での議論の習慣を確立する機会がなかつたため、政権争いや政治体制の変化は全て一部の治者または集団の間で起こつた。そのため民衆が力を持つことがなかつたのである。

また、日本は学問においても（注3）、奈良から平安時代は貴族が、鎌倉時代は武士がその権利を独占していたので、庶民が手を出せるようになったのは室町時代の寺院学校の頃からだ。江戸時代になると藩校や寺子屋が生まれ、多くの人が学問に触られる環境になってくるが、ここから明治以前の庶民がいかに政治と身分制度に縛られていたかが分かるだろう。

長年、上の人間に対して異議を唱えるのがご法度であつた国において、一つの目的のため大勢が議論し、その熱量が政府の首

に届くまでになったこの変革は、日本成立以来の快挙と言っても過言ではないだろう。しかし、今まで政府の圧政に甘んじていた人々に「疑いの精神」を芽生えさせ、倒幕に向かわせた力とは一体何だったのか。その正体は智力——つまり物事を考え、理解し、納得する働きである。『文明論之概略』では、疑う力と智力について「智力次第に進歩するに従て、人の心に疑を生じ、天地間の事物に遇うて、軽々これを看過することなく、物の働を見ればその働の源因を求めんとし、たといあるいは真の源因を探り得ざることあるも、既に疑の心を生ずれば、その働の利害を選て、利に就き害を避るの工夫を運らすべし」と述べ、人々の主張が倒幕に至るほどの強さを持ったのは、一部の上流階級の者に加えて国政を疑う大衆皆で事物判断の力をつけ、政府の圧力に勝る総量の智力を得ることに成功したからだといえるだろう。

これまでの流れから、ともしれば外国の奴隷になかなかねなかつた日本で明治維新が起き、今日まで独立を保っている要因は、「人々が智力を以て専制政治の前提を疑い、国の行く末について庶民も加わり議論したこと」だと結論づけることができる。この

ことから、時代の転換期を生きる私たちに求められるのは、「前提を疑い、豊かな知識を応用し、的確な判断ができる智力」と、「その智力を以て多様な事物についてその在り方・方針を議論する力」であるといえるだろう。

3. 「思考」と「価値観」

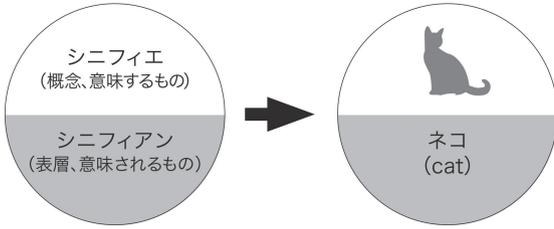
前章ではA I社会における学問の目的の輪郭を捉えた。しかし、いわば「議論できる智力」を身に付けたところで真にA Iと対抗できる人間になれるのかという疑問が生じた人もいるだろう。ここからは、「議論できる智力」がA I時代を生きる人間の基盤となるものであると同時に、人間固有のものであることを論じていこうと思う。その固有性は、「智力」を「議論」に昇華する際の「思考」体系に由来する。

人間とA Iの思考体系における差の象徴の一つが、「シンボルグラウンディング（記号接地問題）」（注4）としても認知される、意味理解と身体性の問題である。この問題は、スイスの言語学者であるソシユールの唱えたシニフィアン（もの名前や表層）とシニフィエ（名前が指し示すものや概念）の問題と言い換えることもできる。ネコを例

に出そう。A Iは「ネコ」という名前・表層を処理することはできるが、身体的な知覚ができない以上実際の「ネコ」という概念を手に入れることができない。すなわち、シニフィアンである「ネコ」という記号をシニフィエである現実の「ネコ」という概念と結びつけることができないということである（資料1）。これは、人間の知識が有するリアリティが、A Iより圧倒的に優れていることの証明でもある。人間が「ネコ」と聞いて思い浮かべるイメージを、A Iは想起できないのだ。これはA Iがネコを「理解」できていないということと同義だ。概念をイメージできない以上、具体物以上に「自由」や「民主主義」などの抽象的な観念を「理解」することは現状不可能であろう。

このようにA Iと人間で知識の質に差が生じる理由は、知識獲得の方法が違うからである。人間を含む生物は、身体による環境とのインタラクションによって情報を獲得し、学習する。環境を知覚し、モデル化を行って運動制御を行う一連のルーチンは「知覚運動系処理」と呼ばれ、この知的領域の上に言葉で意味を理解し言葉で応答するという「記号的処理」をする領域が立ち

上がつてくるとして、松尾豊氏は人間の知の体系を「二階建て」と表現している（注5）。他方で、A Iは神経や器官を持たず、記号的処理を行う際に自らの知覚運動系処理の記憶を保有しないため、記号の羅列でしかない単語からしか「思考」することができない。一階がそもそも存在しない知識



資料 1

に二階フロアをつくることはできないのだ。

以上から導ける事実は、A Iの得ている情報に概念や実物が付随しない以上、A Iが有する知恵はすべて丸暗記の「知識」でしかないということだ。我々人間のように抽象的な概念を実感とともに理解することはできない。つまり具体的な事象を抽象化して全く別の分野に生かす「知識の応用」ができないのである。A Iは計算や画像の出力など、具体的に膨大なデータから学習できる分野では非常に有用である。しかし、気候変動や戦争の終結など、今までに正解がない事象を解決するために以前の事象の本質からヒントを得るといふ抽象的な知的労働に関しては、未だその知能は及ばないのだ。いかなれば、「豊かな知識を応用した判断」ができない以上、A Iには「知識」はあっても「智力」はないのである。

さらにA Iは議論をすること以前の問題を有している。それはA Iが「自らの価値観を持たない」ということだ。私達人間は成熟していく過程で思春期を経ることで、以前までに身に付けた常識や偏見を一度破壊し、自ら再構築するというプロセスを経験することで固有の価値観（つまり既知の

具象同士を固有の配置で結び付ける思考ネットワークの構築やそれぞれの具象に対する感情）を形成する。一方のA Iは製作者に自分の思考のネットワークモデルを構築され、自がないために自分の思考プロセスをそもそも疑うことがない。学習方法によっては蓄積する情報そのものに人間のバイアスがかかっている可能性もある。それゆえA Iは思考しても「自分の意見」を持たない。意思を持たないA Iは、知識を組み合わせて主張めいたものを作ることはできても、社会変革のために相手の価値観を揺るがす「議論」をすることはできないのだ。

「議論できる智力」は人間特有のものであり、価値観の構築というプロセスの有無も人間とA Iの大きな差異である。よってA Iに対抗するための「議論するための智力」とは、「議論する事象について豊かな知識を得て応用し、現状の価値観を疑い新たにそれを構築する力」と言い換えることができる。我々人間は今、「疑いの精神」を以て時代に新たな価値観を吹き込むことを求められているのだ。

4. 令和の福祉になるために

私達は「議論できる智力」を駆使して、

時に人間以上の能力を持つA Iと渡り合っていていかなければならない。そうするにあたって、社会運営の主導権をA Iに渡してはならないのは明白だ。未来にA Iと人間の共存が望ましい形で実現したならともかく、現在の混沌とした状態の中でA Iに権力を持たせ、人間を統治させることは非常にリスクである。それでは、人とA Iの上立つ人物になるにはどうしたらよいのだろうか。時代を牽引するリーダーになるために必要な資質を、近代日本を造った福沢は「人望」だと指摘し、「大任に当るものは必ず平生より人望を得て人に当てにせらるる人に非ざれば、迎も事をなすことは叶い難し」と、『学問のすゝめ』（注6）で述べている。そして人望も、A Iが得ることのできない、人間にのみ与えられる特権だ。人望は、「固より力量に由って得べきものに非ず、また身代の富豪なるのみに由って得べきものにも非ず、ただその人の活潑なる才智の働きと正直なる本心の徳義とをもって次第に積んで得べきもの」であるから、「智力」と「心」がないA Iは人望を得ることができない。そしてリーダーになるにはこの智力と正直さに加えて、実行力や交渉力、カリスマ性など、数値化し

にくい人間特有の能力が複合的に求めらるる。A Iは仕事の精度においては信頼されるようになるかもしれないが、リーダーとして尊敬され、課題解決に向けて人々を引っ張っていく存在は、個性と感情がある人間にしか務まらないだろう。加えて、A Iの判断プロセスがブラックボックス化している以上、事業や計画が失敗したことの責任をA Iはとることができない。責任を持つことと人望を得ることは表裏一体である以上、A Iがどんなに普及し、人間と協同で仕事をするようになっても、そのトップに立ち行くべき方向を示すのは人間なのだ。

5. コンテキストのすずめ

ここまで、私達が身に付けるべき「実学」として、「議論できる智力を備えること」「知識を応用し固有の価値観を構築すること」そして「人望を身に付けること」について論じてきた。これらの能力はそれぞれ独立しているようにみえて、実は全てある概念の延長線上に存在する。その概念とは、背景や文脈、状況を意味する「コンテキスト」である。コンテキストこそが、人間とA Iの最大の違いであり、A Iが獲得すること

は不可能な人間固有の「つながり」を象徴する言葉である。私達が身に付けるべき能力は、全て「コンテキスト」の一言に集約される。

我々人間は家族や学校、職場といった何らかのコミュニティに所属し、様々な関係の人たちとのつながりの中で生活している。そして出身地や性別、学歴をはじめとした多様なバックグラウンドを各々が有していて、無数の意思決定の上で選択した道を歩いている。加えて現代を生きる私たちは、安田雅弘が著書『演劇的知』について（注7）の中で「さまざまな人や歴史の上に自分が立たされている」と述べたように、過去とのつながりも断ち切ることはできない。いまやインターネットで常時世界とつながっている私達は歴史や場所を超えて周りの人間から影響を受けるとともに、選んだ選択によって自分が形作られることから逃れられないのだ。

知識を得ること、それを判断すること、自分の価値観を形成すること、人望を得ること。それらは全て外界や他の人間と関わることによって成されている。いかなれば人間同士のコンテキストの衝突や共鳴によってこれらの能力は育まれているといえる

だろう。そんな人間とは対照的に、AIはコンテンツは存在しない。ほかの人工知能やプログラムと組み合わせられて動くことはあっても常にそれ自身は独立しており、出力する答えも全て製作者が作るシテムをなぞっているに過ぎない。AI開発の歴史はあっても、その過去はAIには干渉しない。コンテンツという観点において、AIは外界から完全に切り離された存在なのだ。人間のみが保有するこのコンテンツこそ、AI社会を生きていく上で人間の最大の武器となるだろう。

価値観の衝突を経験すること、すなわち、自分と違うコンテンツを持つ人の価値観に触れることで、私達はAI時代を生き抜く能力を獲得できる。人と対話をしたり、外国の異文化を体験したりすることも自分の（コンテンツから成る）価値観を知ることができるが、価値観を形成する方法のうち最も直接的で有意義な方法として、読書を提案したい。どんな情報も気軽に手にできる現代だからこそ、本を読むことの重要性は計り知れない。なぜなら、本は著者が自らの意見を掘り下げ、整理して時間をかけて煮詰めたもの、つまりコンテンツと価値観の結晶であるからだ。ブログや動

画と比較にならない情報量であるから、読み切るまでには相応の時間と忍耐力を強いられる。しかし、その分筆者の主張を読み込み、じっくりと向き合うことで自分の中に新たな価値観の引き出しを生成することができる。時には一切受け入れられない主張にも出会う。場合によっては自分の核であった部分が丸ごと書き換わることもあるかもしれない。未知の価値観への対峙と吸収のプロセスを繰り返すことによって価値観は磨かれ、固有のものとなっていく。多様な考え方や信念に出会い、形成されてきた唯一無二の視点は、社会を生きる上で重要なアイデンティティとなるだろう。

6. 予測不可能な現代を生きる

私は以上を以て、AI時代の実学を「人との出会いや読書を通して多様なコンテンツについて学び唯一無二の価値観を構築すること、そしてそこから得た豊かな知識を柔軟に活用し、世界規模の複雑な問題に対して論理的に議論できる力を育てること」と改めて定義したい。そしてこれは、「社会貢献のために個性的な『自分自身』を創り出すこと」と言い換えることもできる。今ここで、AIに奪われかけている特権で

ある「クリエイティブ」の意味するところを捉え直すべきではないだろうか。本論の冒頭で述べた絵や音楽などのプロダクトを生産する行為は、クリエイティブが意味する働きのいわば「表層」に過ぎない。私達に今求められる能力は、自分の「外」に何かを作ることではなく「内」をデザインする力、つまり社会の流れに抑圧されない代替不可能な「自分自身」を構築するクリエイティブティなのだ。

一方で自分自身の変革には多大な苦勞が伴う。かつて五国条約が發布されたときに横浜へ行った福沢も、自身が数年死に物狂いで勉強してきた蘭学が意味を成さないと知ったときは落胆していた（注8）。しかし彼はそこで立ち止まらなかつた。一度意気消沈するもすぐさま新たに覚悟を決めて、英語を学び始めたその姿勢とタフな精神を、私達は今こそ内から呼び起こすべきだ。様々な社会問題を乗り越え、今日まで生きてきた私達人間は、誰もが福沢のような志の強さを生来備えているのだから。

AIと人間の関係性が今後どうなっていくのかは定かではない。一度誕生した技術はなかつたことにならない以上、私達とAIとのつながりが絶ち切られる日は来ない

だろう。しかし、AI社会で生きていくのに必ずしも「偉大な人間」になる必要はない。最大の武器であるコンテクストを磨き、私達が「私達自身」であること、より多くの人々が生きる意味を見出せる社会になることを、心から願っている。

参考文献

〈注〉

(注1) クリス・ダフィ(夏目大訳)『TRANSFORM AIでビジネスを変革する最強フレームワーク』ダイヤモンド社、二〇二二年

(注2) 福沢諭吉(松沢弘陽校注)『文明論之概略』岩波文庫、一九九五年

(注3) 軒将人「古代から現代に至るまでの教育史」『人文学部学生論文集』第十七号、二〇一八年
https://lab.kuas.ac.jp/~jinbungakakai/pdf/2018/h2018_09.pdf

(注4) 松尾豊『超AI入門 デイジーブライニングはどこまで進化するのか』NHK出版、二〇一九年

(注5) 同右

(注6) 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫、一九四二年

(注7) 安田雅弘『《演劇的知》について』岩波書店、『思想』二〇〇七年五月
http://www.yamanote-j.org/updown_archive/shisou.pdf

(注8) 福沢諭吉(富田正文校訂)『新訂福翁自伝』岩波文庫、一九七八年

福澤諭吉(斎藤孝訳)『現代語訳学問のすすめ』ちくま新書、二〇〇九年

福澤諭吉(斎藤孝訳)『現代語訳福翁自伝』ちくま新書、二〇一一年

福澤諭吉(斎藤孝訳)『現代語訳文明論之概略』ちくま文庫、二〇一三年

川村秀憲・大塚凱『AI研究者と俳人はなぜ俳句を詠むのか』dZERO、二〇二二年

高橋海渡・立川裕之・小西功記・小林寛子・石井大輔『図解即戦力AIのしくみと活用がこれ一冊でしっかりわかる教科書』技術評論社、二〇二三年